

台中日本人学校における国際理解教育

前台中日本人学校 教諭

北海道北広島市立大曲小学校 教諭 折内 大輔

キーワード：在外教育施設、現地校交流、国際理解、外国語教育（英語・中国語）

1. はじめに

台湾では建国以来、国民党による一党独裁政治が続いてきた。1988年に李登輝が総統に就任して以来、急速に民主化が進み、2000年、民進党・陳水扁の総統就任により、台湾初の政権交代が実現。2008年の総統選挙では国民党の馬英九が勝利し、再び国民党が政権を取り戻した。2012年には、馬英九が再選出、2016年には初の蔡英文が初の女性総統となり、現在に至る。

一般的には「台湾」の名で知られているが、正式な国号は「中華民国（R.O.C、Republic of China）」である。孫文により1911年に成立したアジア最初の共和国で、現在でも建て前としては中国全土を支配していることになっているが、実際は台湾本土と一部の離島のための支配にとどまっているのが現状である。

台湾の人口2,355万人（2017年）のうち約95%以上が漢民族系住民、残りの5%弱が原住民という比率である。そのため、日常生活においては主として漢民族の文化風習を受け継いでいるものが多くみられる。また、台湾では太陽暦（『國曆』と呼ぶ）と太陰暦（『農曆』）が併用されており、祝祭日や年中行事に関しては『農曆』を用いている。

また、西暦よりも、中華民国の開国記念日（辛亥革命の翌年1912年1月1日）が制定された年を元年とした「民国」という年号が広く使われている（西暦から1911年引いた数が民国年であり、2017年は民國106年）ところが特徴と言える。

台湾の日常生活には宗教がしっかりと根付いている。町の至るところに廟があり、家庭では家族の繁栄を願い、『農曆』の1日と15日にお供え物を携えて廟に出向き『拝拝（神仏や祖先を拝むこと）』を行う。企業や商店では『農曆』の2日と16日に店先に祭壇が設けられ、お供え物や線香をたむけて商売繁盛を願い『拝拝』する姿が頻繁に見かけられる。また、伝統的な台湾の三大節（春節、端午節、中秋節）のひとつ、春節（旧正月）には、朝から晩まで1日中けたたましい爆竹音が街中に響き渡り、各地で盛大に祝われ、台湾全土がお祭り気分になる。

日本や欧米の国々から物資とともに、新しい文化の流行も積極的に取り入れていく現代風の台湾であるが、そんな状況にあっても今もなお古き良き文化がしっかりと根付いている素敵な国であると言える。

2. 台中日本人学校の外国語教育

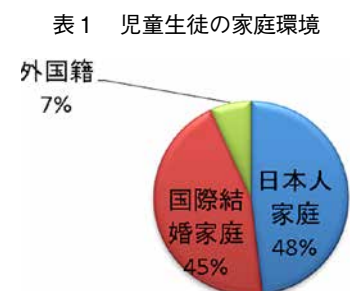
(1) 台中日本人学校の特徴

台中日本人学校の大きな特色の一つとして、「国際結婚家庭の割合が高い」ということが挙げられる。

右の表1を見るとわかるが、2017年度の段階では、両親ともに日本国籍である「日本人家庭」の割合が48%、両親のどちらかが台湾や諸外国籍である「国際結婚家庭」が45%、両親ともに「外国籍である家庭」が7%となっている。

およそ50%が国際結婚家庭（主に両親のどちらかが台湾国籍）である日本人学校は、世界を見てもそれほど多くない。また、日本ではなく台湾に永住している家族も多く、このような環境で育った子どもたちは、日本語と中国語（北京語）、あるいは台湾語を自由に使いこなす。

台中日本人学校では、独自のカリキュラムとして「中国語」の授業を週1時間行っている。このことから、転



校してきた児童生徒も1年もすると日常会話レベルであれば北京語を理解できるようになっていく。現地の学校との交流会や社会見学、校外学習など、現地の方々と接する場面では、子どもたちが通訳として活躍し、現地の言葉を理解できない派遣教員に教えてくれる場面がごく普通に見られる。

高校進学にあたっては、日本の高校進学だけではなく、台湾の現地高校に進学する生徒も多い。この場合、現地の試験を受験することになるため、日本人学校での勉強が終わった後、自主的に中国語での受験勉強を行っている。

なお、台湾の年度の切れ目は9月になるため、日本人学校から現地高校へ受験する場合、日本の3月の卒業式が終わって数か月してから受験が始まるということになる。

(2) 英語と中国語教育

平成30年度現在、週あたりの授業時数は、以下のとおりである。

小1・2	…	週27時間
小3	…	週29時間
小4～中3	…	週31時間

この時数は、日本の標準的な学校の時数よりも週あたりの時数は多いと言えるが、これは、そのまま「英語教育」と「中国語」教育の時間に充当している。小1～中3までの全学年で、ALT（外国語指導助手）の先生によるオールイングリッシュでの「英会話」の授業を週1時間実施。また、現地採用の先生方による「中国語」の授業も週1時間実施している。これらの授業を通し、本校に通う子どもたちは日本語をベースに、英語と中国語も小1から学び続けることができています。英検や漢検を受験することも可能で、毎年一定数の児童生徒が受検している。

一方で、前段で紹介したように国際結婚家庭が多いという本校独自の特徴から、日本語よりも中国語を得意とする児童生徒も多くいる。この中には、日本人学校で学習するにあたり、日本語力に難のある児童生徒（特に児童）も多く在学しており、「中国語」の授業は「日本語」の授業との選択制となっている。日本語が苦手な子は「日本語」の授業、中国語の苦手な子は「中国語」の授業を習熟度によって選べる点は、本校の大きな特徴の一つと言える。

3. 現地校との交流

(1) 小学部修学旅行



小6の修学旅行は、例年2泊3日で実施。左図のように初日に台湾最南端まで南下し、そこから徐々に北上し台中に戻ってくる。その途中に「地磨兒國小」という原住民族の多い集落の現地校があり、その小学校との交流が毎年続けられている。この現地校との交流は過去10数年にわたって実施されており、平成29年度には「地磨兒國小」の修学旅行で台中日本人学校を訪問するという相互交流も実施できた。

訪問先では、相互の文化を発表し合うことが多く、平成29年度の交流では運動会で踊った「ソーラン節」を法被を着ながら披露。現地校からは、原住民族に伝承される歌唱披露や原住民族模様の化粧体験など、貴重な時間を共有することができている。

日本語では「原住民」という表記に差別的な意味合いを感じる。日本のマスコミでは、「原住民」ではなく「先住民」や「先住民族」という表記を使ったほう

が良いとする考えがあり、基本的に「原住」を「先住」と言い換えている

しかし台湾では、「原住民」に対して差別的な意味合いはなく、市民権をしっかりとえている点が日本との大きな違いといえる。

(2) 汝鑾國小（ずうりょうこくしょう）・大雅國中（だいやあこくちゅう）との交流

汝鑾國小も大雅國中も台中日本人学校から距離の近い現地校であり、毎年行っている交流会の一つである。本校と相手校を隔年で会場校として実施しており、同学年同士で交流する。本校開催の場合は「折り紙」「けんだま」「おてだま」などの日本の文化的遊びを教えてあげたりしている。現地校も本校も、子どもは遊びが大好きという点は共通しており、「ドッジボール」「しっぽとり」「けいどろ」など体を動かす遊びも行いながら、交流を深めていく。

なお、前述した通り、本校では中国語を使いこなせる児童生徒が多くいるため、多くの場合、子どもたちが通訳をしたり直接会話したりしている。



4年生の交流場面



現地校では胡坐（あぐら）が一般的

(3) 新民高級中學國中部（現地の私立中学校）短期留学

毎年11月に、中2生徒は1週間、現地の中学校に通い現地の授業を受けている。中国語を話せる子どもでも緊張する状況の中、ほとんど中国語を話すことのできない生徒にとっては、これまでになかった緊張感の中の1週間を過ごすこととなる。例年、参加生徒の多くが不安を口にして短期留学に臨むが、1週間後に戻ってくると一様に「非常に良い体験ができた」「気がいたら友だちもできていた」など、充実した感想を述べている。これは、今後、グローバルな世の中で活躍していくであろう生徒たちにとって、日本には絶対に経験することのできない貴重な体験といえる。

4. おわりに

私は、2015～2017年度の3年間で台中日本人学校で働かせていただいた。現地の先生や子どもたちと普通に中国語で会話する台中日本人学校の子どもの姿に度肝を抜かれ、なかなか経験することのできない6年生の修学旅行を経験することができた。修学旅行では原住民の子どもたちとの交流がメインとなったが、日本とはちがいが差別意識の全くない、市民権のしっかりと存在している「原住民」への認識に、日本との大きな違いを感じた。私たち日本人は、かなり狭い認識の中で生活しているといえる。この貴重な経験と気づきを今後の教職生活の中で生かしていくことが、今後の自分の課題の一つになっている。